

03・告白とキス

一か月前。『02・約束』からは約一か月後。

九月下旬。時間帯は十六時ごろ。天気は晴れ。

気温は十六度程度。涼しく、いや、少しずつ寒くなってきた。

主人公と機械人形は今、大陸東部の端にある山で、モンスターと戦っているところだ。モンスターはなかなかの強敵。だが、サリアには勝算がある。

先月からちまちま続けて来た主人公のレベル上げは、今日ここでクライマックスを迎える予定だからだ。

主人公は岩場に隠れ、銃を構えて、モンスターを狙撃するつもりだ。

この銃は、サリアが持たせた。

基本的に気の弱い主人公は、強い敵に接近すると気後れし、本来の実力を発揮できない。つまり、いかにも勇者らしい『剣で戦うスタイル』は向いていないのだ。であれば、比較的安全な遠くから狙わせる方がよい。銃を持たせよう！

と、サリアは考えたのだ。

しかし、これがまた大変だった。

サリアの専門は人形なので、銃の構造なんて知らない。自作は不可能だ。

そこでサリアは主人公のために人形師・医師・薬師としてのつてをフル稼働し、引きこもりも脱して、二週間かけて、街で一番いい職人に一番いい銃を作らせてプレゼントしたのだ。

というわけで、サリアちゃんってばよ、ついに主人公ちゃんに貢いじまった……。

あれ、いくらしたと思う？

聞いたら、きつとみんな目玉出て、しばらく元に戻らないと思うよ。

いやでもこれは必要経費だから！ いわゆる、世界平和のためのお金だから。

確定申告その辺よろしく！

ま、主人公ちゃんにはあの銃の価値はわからんじやろ。

あたしもお店の人に説明されなきゃよくわかんなかったし。『練習用の安い銃だよ』って言うってプレゼントしたし。

それでもめっちゃめっちゃ大事にしてくれるから可愛いんだけど！

……と、サリアは思っているが、主人公は銃の価値を察している。

サリアには言っていないが……昔、親戚の武器屋でアルバイトをしていたのだ。その他にも色んな仕事を経験済みだ。意外と違いのわかる女なのである。

主人公は、妖精さんから数回にかけてこの銃のパーツを受け取り、組み立てながら、すぐに『これは練習用の安い銃なんかじゃない』と気づいた。

だが、問い詰めたところで、妖精さんがこれを認めるとは思えない。

つまり妖精さんは、主人公に『高価なものをプレゼントした』というプレッシャーをかけたくないのだ。あるいは、高額な贈り物の存在によって、自分たちの関係が変わる事を恐れているのかもしれない。

主人公は妖精さんのそんな気遣いを好きだと思ってしまったし、彼女の好意を無碍にすたくなかった。

そんな主人公のできる事と言えば、何も知らないふりをしながら、この銃を大事にして、成果を出す事だけだ。

そう……今からそれをするのだ。

【最初から最後まで流す】

【次第に音量が小さくなる。既定の位置で一段階、二段階と下がり、その後フェードアウトする】

【0―5秒ほどまで流してセリフ】

サリア、機械人形を主人公の左肩に乗せ、そこから話しかける。

ここは最近、妖精さんの定位置となりつつある。

サリアは左側が義肢だ。

なので、なるべくリアル手足のある右側で主人公に近寄りたいという気持ちがあるのだ。

【「いつもより少しトーンが低い。ゆっくりと真面目に、落ち着いて」

ダメ。まだ待って。もう少し引き付けてからだよ」

モンスターは、まだこちらに気づいてない。

主人公が、サリアの指揮で動けば、勝利は確実だろう。

だけど正直、今は主人公よりもサリアの方が緊張している。

失敗は許されない。主人公に格好いいところを見せるには……ここしかないからだ！

ところでサリアちゃん、最近髪型変えたんですよ。

もうずっと魔力全部この機械人形に回してるから、機械人形じゃなくて自分で切ったよ。サリアちゃん器用じゃね？　すごくね？

これなら、結構大人っぽいと思うの。

ほらいつか？　勇者ちゃんとか対面するかもしれないなくなっちゃったし？

その時にさあ。ちよつとでもよく見られたいっていうか……。

あと食事にも気を付けるようにしてるの。

サリアちゃん、勇者ちゃんに会えるまでは『不摂生キアラな自分可愛い♥』とかすげーバカみたいな事思ってたけど。それも改めようと思って。

これからは健康的になるの。まあ忙しすぎるからまるで寝てないけどな。

だって……好きなんだもん。

あたしの人生は、これまで逃げては大切なものを失って、一人ぼっちになるばかりだった。けどそういうの、もう終わりにしたい。

そのためなら、今まで出来なかった事だってやってみたい。

そして、もし叶うなら、そんなあたしを、勇者ちゃんに褒めてほしい……。って、思ってるんだ。

……そんなの『妖精さん』やってる限り、無理だってわかってるけどね。

お、そろそろよさそう。

「トーンが若干低いまま優しく」

あのモンスターはね。あなたの事、取るに足らないと思ってる。すぐに倒せるって見くびってる」

〈主人公〉

「ですよね……」

サリアが指摘すると、主人公はしゅんとした表情を浮かべる。

だが、ここには誤解があるようだ。

むしろサリアは、主人公が今すぐに強くなれないのなら、今はその『弱そうキャラ』を利用すべきだ……。と考えているのだ。

実際は、すでに主人公は『弱そうキャラ』を利用しまくっている。というか、せざるを得なくなっている。

だが、それは妖精さんに対してだけなので、自覚が薄いらしい。

「トーンが若干低いまま優しく」
でも、それが狙い」

〈主人公〉

「えっ？」

「トーンが若干低いまま優しく」

弱そうに見える事。それが今のあなたの武器なの。
だって本当は違うんだから。

【少し間をあけてから】

絶対に目的を果たしたいなら『私何もわかってません』って態度で、油断させて。
それから焦らずに相手をよく見る事。

そして、相手が隙を見せたら……。

【ゆっくりと言い聞かせる】

一撃食らわせてあげるの。

【トーン低めなまま優しく指示する』

よし。今。撃って」

主人公、頷く。そのまま構えて……。

SE2 ..主人公が銃を撃つ音

【最初から最後まで流す】

「とても落ち着いて」
もう一発」

SE3 ..主人公が二発目を撃つ音

【最初から最後まで流す】

【SE2と同じ音】

「【少しでも強気に】 ※大きな声にはならないようにお願いします
仕留めて！」

SE4 ..主人公が三・四発目を撃つ音

【最初から最後まで流す】

SE5 .. モンスターが崩れ落ちる音

【最初から最後まで流す】

【少し遠くで聞こえる】

※ここでSE1の音が一段階小さくなる。

その時、モンスターのコアの光が消える。倒した証拠だ。

〈主人公〉

「できました！」

サリア、椅子からガタッと立ち上がると、水晶球の前でガッツポーズをきめる。
しかし次の瞬間、無事にモンスターを倒した安堵感で、ヘナヘナと椅子に崩れ落ちる。

やったー！ ふふっ、ふたりで。強敵系モンスター倒しちゃった♥
自己肯定感がガチ薄い事でおなじみのサリアちゃんできえ、今日ばかりは自分を褒めてあげたい気分よ。

……おっとおっと。サリアちゃんってばテンション爆上がりだけど。
『妖精さん』としてはこんな時も落ち着いてなくちゃね。

サリア、機械人形を主人公の正面に移動させる。

「いつもの優しい声に戻る」

やったね！ 先生として誇らしいよ」

〈主人公〉

「はい！ 妖精さんのおかげです！」

そうだろうだ。戦いの本番はここからだっただぜ。

『そうです！ 妖精さんのお手柄です！』とか。絶対言っちゃダメ。

「【ちよつとだけ可愛く怒る】

もう。まだそんな事言ってるの？

【ゆっくりと、優しく言い聞かせる】

これはあなたの力。あなたが倒したんだよ。

【ひとときわ優しく】

本当によく頑張ったね」

よし。今度こそミッションコンプリートだぜ。

そもそも、なんで今回このモンスターを狙ったかってね？

それは、こいつが歩くレア素材だからとか、搦め手から倒しやすいからとかもあるけど。こいつが、勇者ちゃんの『自信』のステを上げるのに最高効率な相手だからですよ！昔こいつが北部で大量発生して大変だったって、サリアちゃんは調査済み♡つまり勇者ちゃんは、こいつのやばさを身をもって知ってるのよ♡なのに倒せちゃったんだぞ。すごいよね♡

はあ、長きにわたる勇者ちゃん育成計画も、本日ついにステージ一が終わった気分です。今日までサリアちゃんは、勇者ちゃんにちよつとずつ自信つけてもらうために、育成計画書を作ってたさ。少しずつ、少しずつ、でも確実に強くしてきたの。

で。今回ここで一気に『かつての脅威を単独で倒す』というおっきめの成功体験ですよ。

まあ、先生とか名乗ってるけど、しよせんは素人なんでね。

粗は色々あったと思うけど、勇者ちゃんは本当に頑張ってくれたから。成果を出せて嬉しい。いい生徒のおかげで、あたしも少しはいい先生になれたみたい。

サリアがホッと胸を撫でおろしていると、そこで主人公が微笑む。

サリアの大好きな『こちらを見上げてニコッ』である。

それを見た途端、サリアの疲労感は一瞬で消えていく。

いや、本当は消えていない。消えたような気がするだけだ。

それでも、頑張ってよかったと、心から思える。

〈主人公〉

「へへ……嬉しいです……」

ああ、勇者ちゃん可愛いぞ。本当によくやったぞ！

そんな勇者ちゃんの事、あたしは今ぎゅーって抱きしめたいって思ってます！
まあそんなの『妖精さん』でいる限り、無理なんだけど……。

そうある事を、あたしが選んだんだけど……。

ところで一気に疲れが出た。少し休んでいいか？

「※マークのセリフ終わりまで、かなり疲れているが、必死に明るく振る舞う」
ふう。じゃあ解体始めようか。

とはいっても、こいつの肉は食べられたものじゃないから。

高値で売れる毛皮と爪は回収して。

他のパーツは持てる分だけ持って、終わりにしよう。

じゃあ、お姉さんはそこでちよつと休むね。終わったら教えて」※

※ここでSE1の音量がさらに一段階下がり、かなり静かになる。

SE6 .. 主人公がモンスターを解体する音

【最初から流す】

【規定の位置まで流す】

〈主人公〉

「あの。妖精さん。もしかして、体調悪いんですか？」

サリア、ドキツとして慌てて否定する。痛いところを突かれてしまった。

サリアの疲労は正直言ってピークだ。

さらに目的を果たしたものだから、その安堵感で、今にも眠ってしまいそうである。

【少し慌てて】

ううん？ 元気だよ。

ただ、緊張の糸が切れたっていうか……。

本当に、平気平気！」

〈主人公〉

「なら、いいんですけど……」

※ここでSE1がフェードアウトし、SE7に切り替わる。

10秒ほど沈黙。

SE7 .. 山地の環境音2

【最初から最後まで流す】

【トラック終わりまで繰り返し流す】

主人公は納得いかない様子だ。

それでも、ひとまずサリアに従って解体作業を始めている。

うーむ、これはまずいかも。主人公ちゃんってこう見えて聡いからなあ。

あと頑固だし。すっかり油断できない子に育ちつつありますよ。どうしたものか。

今、機械人形は少しだけ離れた所で休憩している。

本当はまだまだ休みたいところだが、サリアは、主人公に体調不良を悟られたくない。そこで、普通に話しかける事にする。

その話題は、今後についてだ。

主人公は最近、かなり強い冒険者から『ぜひとも自分を仲間に加えてほしい』と誘われたのである。

これもサリアの教育の賜物だ。主人公の評判は、着々と上がっている。

【話題を変える】

そうだ。この前のお誘い、どうするか決めた？

いい話じゃない。あんな強い人が仲間になってくれるなんて」

〈主人公〉

「ああ。あの話はお断りするつもりです。今の私じゃ、足を引っ張るかも知れませんが……」

しかし、主人公はあつさりこう答える。主人公には、仲間を増やす気など一切ないのだ。それはもちろん、妖精さんと二人っきりでいたいからだ。

他の冒険者なんて、どんなに素敵でいい人でも、主人公にとっては邪魔者でしかない。だが、主人公はその理由を『自分では、足を引っ張るかも知れないから』と設定してしまふ。

卑屈なキャラクターを演じすぎて、それを維持するために、妙なところで素直になれなくなっている。

だから、主人公を高く評価するサリアは、それが不思議でならない。

「【不思議そうに】

どうして？ 一人で頑張るのも、そろそろ限界でしょう。

あなたも強くなったし『足を引っ張るかも』なんて心配する事ない。

これからのためにも、誰かと組んだ方がいいよ」

もちろんサリアだって、本当は二人きりでいたい。
ずっとイチャイチャ二人旅がしたいに決まっている。
しかし、それは主人公のためにならないとわかっているのだ。
……いざという時、自分は隣にいないのだから。

〈主人公〉

「……一人じゃないです。私には妖精さんがいますから」

【少し困って】

でも、こんなチャンスもうないかもしれないよ」

※ここでSE6がストップする。SEのキリの良いところで止めるイメージ

〈主人公〉

「解体終わりました！ 見ていただけませんか？」

主人公、そこで無理やり話題を変える。

サリアは『まだ話は終わっていないんだけど……』と思いつつ、正直なところ、話題が変わった事にホッとしてしまう。

第三者が理由で、主人公と険悪な雰囲気になりたくないのだ。

「急に話題を変えられて驚く」

あ、終わった？」

〈主人公〉

「はい！」

そしてサリアは無意識に主人公の機嫌を取り、また問題を先延ばしにしてしまう。

「うん！　すごく綺麗に処理できたね。えらいえらい。」

「少し間をあけてから」

じゃあ、街に戻ろうか。

【明るく。無意識に主人公の機嫌を取ってしまう】

そうだ。頑張った勇者ちゃんにはご褒美をあげなくちゃね。

何がいい？　装備でもマジックアイテムでも、何でも用意するから」

……あーあ。また選択肢ミスったな。

こんな露骨にご機嫌取りなんかしたら、かえって嫌がられるじゃん。

『妖精さんは、主人公ちゃんをモノで釣れる女だと思ってる』って思われかねない。
あたしならキレるよ。

あたしだって、本当は他の人の話なんかしたくない。

けど、そっちの方が主人公ちゃんのためになると思って、涙をのんで提案してるんだよ。
なんでそれをわかってくれないんだろう。この子は……。

〈主人公〉

「あの」

「【優しくにこやかに。内心少し怯えている】

うん？　どうかした？」

サリア、話を戻されるのか、あるいは主人公が怒りだすのではないかと不安になる。
しかし、主人公は予想だにしない事を言い出す。

〈主人公〉

「好きです！」

「思わず素に戻る」

へっ!？」

サリア、頭が真っ白になる。寝てないせいで最近硬直時間が長い。突然の出来事に対処しきれないのだ。そんな中、主人公は続ける。

〈主人公〉

「あの。今日、狩りに成功したら、言おうと思ってました。成功したので言います！私、妖精さんが好きです。大好きなんです。

初めて助けてくれた日からずっと、あなたの事が好きです。

正体は明かしてくれなくていい。これから、言いたくない事は言わなくていいので。今のままでいいから、私の恋人になって下さい！」

えっ……今、何が起こった？ 主人公ちゃん、なんて言った？

「【必死に落ち着こうとするが、完全に混乱している】

あ、あ。急に何を言うの？

だから他の仲間は作らないし、それを言うために今日頑張ったって事？」

〈主人公〉

「そうです」

「【思わず素に戻ってしまう】

それは、その。

【何とか持ち直して妖精さんのキャラらしく話す】

二か月前のあの日、あなたを助けたのが私だからそう思うだけだよ。
あなたはまだ世界を全然知らなくて。仲間も私だけで。

つまり今一番近くににいるのが私だから、特別に見えるだけだよ」

あー、言いながらしんどいわ。サリアちゃん、わかってんじやん！

主人公ちゃんがあたしにこだわる理由なんて、それしかないんだよ。

自分でわかつちやつてるのが切ない。しかも、そう仕向けたのはあたしだっていう……。

サリア、自己嫌悪に陥るが、主人公はこれをはっきり否定する。

〈主人公〉

「違います。私も、最初は『そうなのかも?』って思っていました。

でも違う。私は、私の事に、私以上に親身になってくれる妖精さんが好きなんです。

私も同じようにあなたの力になりたい。もつと深い関係になりたい。だから言いました。……そ、れに。私だって知ってます。

このモンスター、かなり頑張らないと、倒せないやつです。

でもできました。私、ちゃんと立派な勇者に近づけてますよね?

どう、でしょうか? 前よりも私、あなたにふさわしくなれてるって思ってます!」

ちげーよ! あたしが、勇者ちゃんにふさわしくないんだってば!

勇者ちゃんは、ほんとにあたしの事わかってないよな! そんなの当たり前だけど!

サリア、もう訳がわからない。

もはや何を言っても、主人公はまるで聞いてくれない気さえしてくる。

「【心配そうに】」

それにあなた、私の事何も知らないでしょう。
もし私が悪の手先だったら、どうするつもり？」

〈主人公〉

「それでもいいです」

即答すんな！

「【呆れて、論すように】」

あのね。簡単に言わないで。それでもよくなんかないよ？
私『ちゃんと相手をよく見てから行動しろ』って今教えたよね？」

しかし、主人公はこれでも引き下がらない。

〈主人公〉

「もう見極めてます。妖精さんは絶対に悪い人じゃない。私の一番大切な人です」

サリア、いよいよ目が回ってきた。

何日も寝ていないサリアの脳は、健康的に暮らしている主人公の脳の回転速度に、完全に負けている。

ああ、そんなまっすぐに見つめないで。可愛いから。

ダメなんだってば。あたしたち、これ以上近くなっちゃいけないの。

……ていうかさあ勇者ちゃん、最近『それ』が自分の武器だって自覚したよね？

あなたがピュア〜で。素直〜で。一途〜な、ムーブすれば。

あたしが即メロメロになって、すぐ言う事聞くとってない？

その通りだけどな！ サリアちゃんは、激チヨロだぜ！

だから……チヨロいから即堕ちしたいんだけど。今は……今はダメ！

「呆れつつも優しく」

もう。全然人の言う事聞かないんだから。

「少し間をあけてから」

わかったよ。あなたの気持ちはわかった。

【素に戻ってしまう。声が震える】

好きって言ってもらえて嬉しい。でも私は……」

〈主人公〉

「わかりました。今は、私の気持ちを知ってもらえたらそれでいいです」

【ホツとする。引き下がってくれたのだと勘違いする】

そう……よかった」

サリア、話が終わったのかと思い、安堵しかける。

頑固で、一度走り出したら止まらない主人公がこんなにあっさり引くのは妙だが、とにかく今諦めてくれればそれでいい。

だが、やはりこれでは終わらなかった。

〈主人公〉

「今はご褒美だけでいいです！」

「『えっその話!』と驚く」

へっ!？」

〈主人公〉

「さっき、ご褒美くれるって言いましたよね？」

「しどろもどろになるが、認めざるを得ない」

それは言った。ご褒美あげるって。でも、そんなの……」

〈主人公〉

「今はお付き合いしてくれなくていいです。

だから、キスしていいですか。ご褒美はそれがいいです」

「【すぐく恥ずかしい】

何それ……」

サリアの頭は、いよいよショートしそうだ。

勇者ちゃん、何考えてんの？ コミュ障の理解の範疇を超えたぞ今の提案は！
付き合っていないのにキスするとか、ビッチじゃん！
そんなの、いいの!? ダメじゃん！

……ねえ、勇者ちゃん。とんでもない女だぜ、君は。
普段は従順そうな雰囲気近づいてきておいて、肝心な時はこっちの意思を無視する。
絶対をお願いを聞いてほしい時は、こっちの選択肢を奪って、強制的に言う事を聞かせる。

つまり、勇者ちゃんはあたしの事『好き』とか言っておきながら、本当はあたしの気持ちなんて、少しも考えてくれないんだ。本当に勝手なやつだよ君は。

でも、好き。

あなたがどんな人でも、あたしはあなたが好きだ。

最初の美化した姿とはまるで違ってる、思ってたよりずっと手ごわい、困ったやつだとわかって、あたしはあなたが大好きだ。

『好き』に気持ちを固定されちゃったから、もうどうする事もできないの。

こんなの、バカ極まってる。チヨロいにもほどがあるよね。わかってるんだよ。でも、好きだ。あたしは、あなたともっと近くなりたい。たとえば、本当の事を話せないままでも……。

「かすれた声で確認する」

これ、機械人形の身体だよ。本当の私はずっと遠くにいるから、あんま意味ないよ。いいの？ それでも。

【少し間をあけてから。『キス』という単語を言うのが恥ずかしい】
キス、したいの？」

〈主人公〉

（頷く）

5秒ほど沈黙。

無言になり、二人の顔が近づく。
サリア、最後の抵抗のように言う。

「勇者ちゃんはバカだね。」

【少し間をあけてから】
でも。

【軽く一回だけキスされる】

※主人公が機械人形にキスした音を、代わりに演じるイメージです
ちゅっ。

【少し間をあけてから、軽く二回キスする】

※主人公が機械人形にキスした音を、代わりに演じるイメージです
ちゅっ……ちゅ。

【少し間をあけてから。泣きそうな声で。素に戻り一人称が『あたし』になる】
あたしもバカだね……」

5秒ほど沈黙。

【軽く一回だけキスする】
ちゅっ。

【かすれた声で小さく】
好きだよ……。あたしも、あなたが大好き」

このままフェードアウトして終了。